

艶本^{えほん}

丹波篠山鄙乃戀^{たんばささやまひなのこい}

第二部

前編

淫
齋
白
繚
画

英
紅
炎
作

お久保采女將監物太郎行長は、第八代国主として丹波篠盛国二萬五千石の家督を継いで三年後に初めてここ南丹波の所領にお国入りした。文政元年の八朔のことだった。

行長が先代の頼長の急逝によって国主の座を継いだ時、まだ二十五歳の若さだった。行長には、江戸国邸の中屋敷に正室お香の方との間に世子松福丸の他二人の姫があり、生活は比較的つましく、お香の方との仲も睦まじかった。

行長は温厚な性格で、専ら文芸を好み、江戸の文人たちとの交わりが深く、折りに触れて吉原などにも足を向けて、「粹人若様」と異名をとっていた。そんな柔らかな生活をしてきた行長が、突然の父親の死で国主の座を継ぐことになって、その生活は急変した。出仕に際しての何から何まで細かに決められた有識故実うしやくこじつに則った柳営でのしきたりに、行長は疲れ切った。それに小国故の柳営内での人間関係で受ける陰湿な侮りもあった。そんな窮屈きうくつずくめの柳営内での生活に苛立つ行長を、江戸詰家老笹部家老笹部右衛門はよく補佐し、支えた。

笹部右衛門にとって、行長は我が子にも匹敵するほど可愛い存在だった。藤右衛門は、行長が松千代と呼ばれていた幼少のみぎりより、剣術指南と学問指南の二役を務め、松千代も「じい」、「じい」

と呼んで、藤右衛門によく懐いていた。そして、実弟の笹部孫左衛門の娘で、姪に当たる加代を養育乳母として松千代のお側近くに任せさせ、松千代の十五歳の元服に際しては、お内証として初伽の儀に当たらせ、松千代に性愛の心得を教え込ませ、自らは、大殿の命により、烏帽子親として松千代に監物太郎行長の諱を与えた。

大久保家は、庶流ながら戦国大名の尼子氏に血脈を辿り、豊臣方の親国であつたにもかかわらず、関ヶ原の戦いでは徳川方に従って兵を動かさず、その功で家康から小国ながら国持大名として南丹波の旧来の領地を安堵してもらい、徳川の親国として篠盛国を立国するに至った。篠盛国の家臣は何れも尼子氏縁の家臣で、中でも江戸家老の笹部家と城代家老の大膳寺家は、何れも血筋は異なるものの尼子氏の庶流に血脈を辿り、国主の大久保家にとってはなくてはならない重鎮で、両家の役職とも代々世襲だった。

城代家老の大膳寺紋十郎行衡は、行長と香姫の祝言に際して父の大膳地紋左衛門通衡の名代として江戸表に出向して、当時まだ十七歳だった若殿行長候に初対面して以来、若殿には会っていなかった。

大膳寺紋十郎は、城代家老として、初の国入りをしてきた新国主行長と対面して、当時と変わらず白面の貴公子ながら、行長の温厚で大らかな人柄は一回りも二回りも懐深く大きく成長されていることに気付いて、大いに安堵した。

国主の座に就かれるまでは、「粹人若様」と呼び慣わされて、江戸文芸の粹と通の世界に浸る生活を送っておられたと聞いていたため、在国中この鄙の篠盛の里で一年余の期間をどのように過ごして頂くのが相応しいのか…、紋十郎には見当がつかなかった。

「窮屈なお駕籠に乗つての長旅のお疲れが癒えるまで、暫しごゆるりとお過ごし召され、その後にご領地内のご見聞となされては如何でござりましょうや…、また、何事かご希望の向きなとござりますれば、何なりとお申し付けくださりませ…、能う限りの手を尽くしまして、ご希望に沿うように致し参らせましょうほどに…」

紋十郎は若い国主の機嫌のありようを探るような口調で言上した。

「おう、いかさま東海道の長旅は窮屈の極みじゃつたが、京の都で五日ほど骨休みを致したれば、今は余程気分も伸び伸びしておる…、京は、流石に文化芸能も豊かで、女子も見目麗しいものが多く、願わくば京都所司代にご推挙賜りたいものじゃと思つたわ…、わつはつはつは…」

行長は、噂に違ぬ粹人らしい屈託のなさで磊落に云つた。

「お江戸や京のようなわけには参りませんが、鄙には鄙の良さもござりましょうから、後ほど楽しくお寛ぎ頂けるような趣向を何ぞご用意参らせましょう…、先ずは、湯など遣われて、旅の埃をお払い下されませ…」

と云つて、紋十郎は腰元に申し付けて、国主を湯殿に案内させた。

行長の日常の身の回りのお世話をする土岐田禎之進と云う小姓役の番士が江戸から従つて来ていた。

「お国にはお国のしきたりもござりますれば、其許は、殿様のご滞在中ここでごゆるりとお寛ぎくださいませ。お殿様の日常のお世話は腰元どもにさせましようほどに…」

と云つて、紋十郎は武骨な男の世話役を遠避けることにした。

それは、「ご在府中の三年間の国主としての生活で心身共に疲れ切つて居られる故に、国元では極力お寛ぎ頂けるように図りたい…」との、江戸家老笹部籐右衛門の書状を受けての方針だった。

湯殿で世話をしたのは、白装束の三人の腰元だった。それは、行長の江戸表の生活では、小姓役の番士が国主の世話をする上屋敷でも、中屋敷でも、下屋敷でも常でないことだった。

湯殿番の腰元たちは取り立てて見目形が良いものを選んではいなかったが、湯煙の中で細身の身体を艶めかしく蠢かして髪や身体を洗い、鬘

を結び直してくれる腰元たちの一種幻想的な姿態を目にしていて、行長はいやがうえにも気が昂ぶるのを抑えることが出来なかった。とは言え、三人もの腰元が居る上に、「粹人若様」と世評された文人国主としての自制心もある故に、不埒な行いに走ったり玉莖を了え勃たせたりするようなことにはならなかった。

篠盛国の城郭は、篠盛川の溪流が篠盛盆地の平野部に出て丹後に向かう中流で枝分かれした忍川の左岸から水を引いた外堀に囲われ、比較的峻険な三峰山を背後に背負った平山城だった。篠盛城を中心に水壕の前後左右を武家屋敷町が取り囲み、その外郭、特に忍川の対岸に商人町、旅籠町、鍛冶町などが展開していた。城郭の中は、国主の居住館である本丸主殿の他、二の丸本殿、三の丸副殿に、城主の執務室である御書院や客殿などが展開し、その外周辺には重臣等の居住館が配置され、また城郭の四隅には、三層の天守閣の他、三個所の望楼が配置されていた。

篠盛国の城郭の構造は、戦国大名の城郭の色合いを色濃く残し、一旦火急の際には背後の三峰山の峻険な溪谷沿いに、尼子氏の難攻不落の出城といわれた出雲大久保城に至る山道に通じていた。

そのような、平和な時代には些かそぐわなくなっている城の本丸主殿の大広座敷に、百五十余名の江戸表より随行したお目見え以上の国士を加えて国元在住の国士一同打ち揃って、国主の初のお国入りを讃える宴が設えられた。

家老の紋十郎は、若い国主の初の国入りに備えて、予め家中の国士の娘たちの中から、芸能の巧者を選びすぐって、賑やかにもてなす準備を整えていた。碧深い山と清い水の流れる溪谷や河川の美しい自然以外には、田畑と栗林があるだけの山深い鄙の国のこととて、京大阪のように文化的に洗練された取り立てて見目麗しい娘たちが居るわけではなかったが、「鄙は鄙なりの情緒を表現できる腕を持った娘たちばかり選りすぐっているのだから、文芸に長ずる御殿の嗜好にも背かない筈だ」と紋十郎は踏んでいた。

城代家老の大膳寺紋十郎以下国詰と江戸詰のお目見え以上の国士全員が袴姿で大広座敷に打ち揃って平伏する中、行長が狩衣姿で上段の間に着座すると、紋十郎が家臣一同を代表して改めて長旅の労を労い初対面の歓迎の意を表する挨拶をした。それに対して、行長が国侍たちの日頃の役務の労を労い、国主としての初対面の挨拶をして、儀式張った対面の儀を簡略に済ませ、一旦座を外して平服に着替える間に、腰元たちが膳部を運び込んで、上段の間の前の一部を演物のために開けて、国士各人に配膳して暫し待つほどに、行長が薄い空色の小紋に、同系色の紋付

羽織を纏つて再び自席に着くと、奥女中が恭しく膳部を捧げ持つて行長の前に据えた。すると、間を空けずに振袖姿の娘たちが黄色い華やいだ聲を上げて、箏や笙、しちりき、鼓のお囃子に乗つて唄いながら舞い出て来た。娘たちは、何れも家臣の娘で、その芸能の才を買われて、国主の国入りの期間、腰元としてお側に仕えるように言い付かつていた。

腰元たちの披露する芸は、部屋住み時代に吉原遊客でしばしば遊んでいた行長の目からすると、如何にも垢抜けない感はあるが、懸命に国主をもてなそうとするその姿は健気に映つた。どの娘も取り立てて眉目良くはなかつたが、中でも於松はどちらかと云うと醜女^{しじめ}だつた。於松が醜女^{しじめ}の印象を与えているのは、幼女の頃に患つた疱疹^{あはた}による痘痕^{あはた}が原因していた。ただ、於松は他の娘たちよりも大柄で、色が抜けるように白く、太り肉の身体をしなやかにくねらせて舞い、火照るに連れて腕や顔や抜いた衣紋から覗ける首筋や肩口が薄桃色に上気して輝き、醜女と云う印象を帳消しにして、妙に男心を刺激した。

その上於松は、利発で性格が素直で陽気なため、自分の肉体的な欠陥を少しも気に掛けず悪びれることがなく、朗らかだつた。そして、何よりも行長の注意を惹いたのは、於松の澄んで透き通るような、鶯の鳴き声のような唄声だつた。

宴が終つたあと、紋十郎から「芸を披露した娘たちの中から八名の者にお付きの女中として任せさせる所存…」と聞いて、「なれば、名は知らぬがあのを必ず加えてくれ…」と、一番大柄なこと、色白なこと、そして醜女^{しじめ}だと云うことを挙げて明らかにそれと判るように於松を特に指名した。

「粹人の御殿の、酔狂か…」

紋十郎は意外に思つて内心で呟いた。

行長には、於松の何事にも悪びれないところ、優し気で素直で朗らかなところが気に入っていた。それに何よりもころころと咽の奥で転がすような澄んできれいな於松の声に、「心が癒される…」と思つていた。於松が側にいると行長は気が安らいだ。於松が醜女^{しじめ}だと云うことは気にならなかつた。於松の性格や立ち居振る舞いがそれを感じさせなかつた。行長は、口にこそ出しては云わなかつたが、於松が「不浄の日」で殿様の前に出ない時には気が塞いだ。兎に角、いつも「於松」、「於松」と側に呼びたがつた。

そして、そのことは、行長が一週間ほど掛けて領内を巡視して戻つた夜ざりに起こつた。

腰元たちが行長の鬨を整えて寝間を抜け、於松が行長の寝間で御髪^{おぐし}を整えて行長の元を退出しようとした時に、行長は於松の裳裾を掴んで曳

き戻そうとした。その弾みで、於松は、「あつ…」と小さく声を発して行長の膝元に倒れ込み、間髪を入れず行長が於松の上に覆い被さった。

「あれまあ…、お殿様、御無体な…、お許し下されませ…」

と云つて、於松はその場を逃れようとした。

「与は、そちが所望じゃ…、苦しゅうない、静かに与の望みに従え、於松…」

と云いもつて、行長は於松の裳裾から手を差し入れて、太股から腰回りにかけて撫で擦った。

「……………」

それを「主命」と聞いて、於松は抗うのを止め、身体から力を抜いて、黙つて行長の成すがままに任せた。

「おお、おお…、そちの肌はすべすと柔らかうてかわゆ気じゃのう…」

と云いながら、行長は掌を更の上にに向けて滑らせ、於松の額口の生え際から空割を捉えて揉みしだいた。

「わらわがお殿様のお手付きになる…、嫁に貰い手がないと云われていたわらわがお殿様のお側女そばめになる…、とと様、たた様、これはわらわの出世かや…」

行長の掌と指の動きに次第にこれまで味わつたことのない心地よい感覚に捉えられながら、於松は心の中で父母に問うていた。

生まれついでに体質なのか、於松の額口の生え際は淡く柔らかい柔毛で覆われていた。於松が抗わないことを覚つた行長は、指を奔放に動かして、小核と空割の髪を弄り、唇で於松の頰おとがほや唇を吸つた。行長の指が於松の小核と火床口を捉えて揉みしだいた時、於松は太股を瘻ひきろるように震わせて「ああ…つ…」と、絹を裂くような声を細く長く引いた。於松の息が次第に慌ただしくなり、腰も太股も汗ばんできていたが、火床口はまだ淫水で潤んではいなかった。行長は、親指の腹で小核をもみ、長い中指の腹で火床口の周りを撫で擦り、中指を火床の中に静かに沈めて行つた。この辺りの手管は、流石に吉原遊廓で「粹人」と謳われた行長らしく手慣れたものだった。

行長の中指が中の節まで火床の中に埋没した辺りの内襲が少しずつ膨らみかけてきて、火床口が行長の指を締め付けてきた。

「この娘の開はなかなか締まりが良いそうじゃ…」

行長は頭の中で呟いた。

行長が更に中指の腹でその辺りの内襲を摩り続けるとその内襲が固く膨らみ、少しずつ淫水が漏れ出て来て、指の動きが滑らかになった。そ

の指の動きが於松に快感を与えるのか、於松は全身を震わせて悶え、於松は一層高く鶯のような透き通った声を細く長く引いた。

「これ…、殿居の者に聞こえるではないか…、もそつと静かに致せ…、於松」

於松の耳元でそう云いはしたものの、於松の唄を聞いた時に期待した通りの於松の反応の仕方に、行長は満足していた。

行長の丁寧な手技が暫く続いて、於松が息も絶え絶えになつて悶え、於松の火床口から淫水が漏れ出てくるようになったのを知つて、行長は、「頃はよし…」と判断して、了え勃つた玉茎を下帯から扱き出して、雁首の先で火床口の周りを弄り、徐々に腰を沈め、雁首が埋没しかけたところで一気に腰を突き出し、何度か腰を動かし、更に奥に押し込んで行つた。次いで雁首が膨らんだ内襲の辺りに達すると、行長はそこで、早腰を遣つて擦り続けた。

「ああ、痛い…、ああ、ああ…つ…、お殿様、もうもう、痛とつて、切のうごぎります…、

松は、もう、もう、もう、気が変になりそうでござります…」

於松は行長の腰の動きに翻弄されながら、息も絶え絶えに声を上げた。

「もそつと静かに致せというたであらうに…」

そう云いはしたものの、行長は於松の反応の仕方がいたく気に入つた。そして、更に一気に玉茎を押し込むと、於松は「ああ…つ…」と声を発して逃れようとしたが、同時に於松の火床口がきゅ…つと玉茎の根本を締め付けて、行長の腰の動きが封じられた。その時、於松は喜びの極みに達したのか、全身をわなわなと震わせたあと、「ああ…つ、松はいずこにか引かれて翔んで参ります…」と叫ぶなり、ぐったりとなつた。

「遅れたか…」と、行長は慌てて腰を動かそうとしたが、根元でしつかり締め付けられていて果たせず、その場で腰を回転させること暫し、雁首周辺の玉茎も於松の内襲で締め付けられ、夢精でも見ているような感覚で自ずと内より迸り出るに任せるようにして精を弾け飛ばし、於松にひつしとしがみ付いていつた。

「これぞ世に言う上品と云うべきや…」

行長は於松の体に折り重なつて絶頂の余韻を味わいながら、ぼんやりと思つていた。

「そちは、愛い女、子よのう…」

行長は於松の首筋を指で撫で擦りながら云つた。

「思いがけずお殿様のお情けを賜り、松は嬉しく誇りに存じます…」

於松は行長の腋の下に顔を埋めて涙を流した。

「其方は、嫁には行けぬ…」と日頃父母から云われ続けていたし、お殿様の初のお国入りに当たつて、奥女中としてお世話するように言い付かつた時にも、このようなことがあり得ることなど、一言も聞かされていなかった。

「なのに、お殿様は、「愛い女子…」というて下された…、
わらわの何処にそのような秘密が隠されていたのやら…、

これも、痘痕あぼただらけの顔を卑下せず、明るく朗らかに文芸、芸能に打ち込んできた賜物か…、

お殿様のただ一度だけの氣まぐれでなくば、わらわがお殿様の在国の側女にお召し上げにならぬとも 限らぬ…、この幸せ、なろうこと
なら、なんとしても放しとうはないものよ…」

まだ了え勃つたまま蠢うごいている不思議な生き物のような行長の玉茎の頭を子宮口に感じながら、於松は空ろな目をして考えていた。

於松は、この年の弥生に十七歳になつたばかりで、郡奉行の朝比奈絃九郎配下の見回り組同心、東野孫三郎を父とし、母紀世との間の長女として寛政十四年の弥生に篠盛城下の東同心町の同心屋敷で生まれた。生まれた時、於松は母紀世の血を引いたか、抜けるような色白の幼気いたいけな幼女で、誰しもが、「思いがけぬ玉の輿こしに乗れるやも知れぬ…」と思つた。だが、「好事こうずま魔多し…」の例え通り、また「七歳までは神の手の内…」と云われる所以の五歳の誕生日が過ぎて、於松は重い瘡瘡あぼたに罹つて生死の境をさまよつた。医者も見放したにも拘わらず、母紀世の必死の看病の甲斐あつて、奇跡的に黄泉よみの国から生還した。とは言え、身体中が痘痕あぼただらけになり、殊に顔の痘痕は深かつた。それは女子おなごとしては致命的だと思われた。「この娘は嫁には行けぬ…」と思わぬ者はなく、孫三郎は、「折りを見て仏門に帰依させて、尼にするしかなかるう…」と考えていた。

だが母の紀世きせは違つていた。於松の抜けるような色白の肌と、しなやかな身体と、何よりも鶯の鳴くような澄んできれいな声に目をつけた。そして、於松が六歳になると芸能の才を磨いて、お城での祝宴などでその才を發揮できるようにしてやろうとあらゆる努力を惜しまなかつた。

幸い於松は素直で穏やかな性格の娘だつた。母に云われるままに箏や笙、横笛や鼓、三味線、舞いなどの伎芸を熱心に身に付け、持ち前の鶯の鳴くような可憐な美声で長唄などを謡い、音曲の巧者になつていった。何よりも母紀世にとつて嬉しいことは、於松が醜い痘痕顔になつたこ

とを少しも卑下することなく、素直で朗らかな性格をそのままに育つて、何一つ悪びれる様子を見せないことだった。娘盛りになるに連れて、そのような陽気できて嬌かな性格が於松に一種独特の雰囲気を与え、大柄でしなやかな身体の所作と共に、色白の肌が於松の身体の欠陥を覆い隠す役割を果たした。

そして、図らずもそのように育つた於松の才能が発揮できる機会が巡ってきた。それが、大殿頼長の急逝で若殿行長が国主の座に就き、四年目にして訪れた初のお国入りの機会だった。誰しもが「醜女」と思っていて「問題にもならない」と考えていたにも拘わらず、お国入りの祝宴で真っ先に国主行長の目に留まったのは、於松だった。行長には、於松の痘痕顔は問題にならなかった。上気して薄桃色に輝く於松の抜けるような肌の白さと、鶯の鳴くが如き澄んで透き通った唄声と、大柄でふくよかでしなやかな舞姿が全てだった。

於松に「国主の特権」とばかりに手を付けて、肌を合わせて、行長は改めて「於松が自分の望んでいた以上の資質を備えた女子であること」に気付いた。於松の備えが詭えて作らせた刀の鞘のように己が道具立ての身の丈にびつたりと添うているのだ。それに於松の身体の天性の作りなのか、ただ玉茎を挿入しているだけで、於松の内裏が玉茎を揉みしだいて来るような振舞いをして、何度も自然に精を爆発させられる。於松がぐったりとなつていることから推して、於松が意識してそうしているのではないことは、粹人行長にはよく分かる。吉原遊廓のその道の練達の花魁として、このような芸当はしたことはなかった。「これは掘り出し物だ」と、行長は思った。

「正室のお香とは、二人ともまだ極若くして祝言を挙げたことによって、繁く睡み合うてきたが、このような感じは一度も抱いたことはなかった。」
行長はこれまでの性愛の経験を振り返り、初のお国入りによつて於松と云う思わぬ贈り物を手にしたことを覚り、その幸運を大いに喜んだ。

行長は、自分の腹の下で恍惚の表情をしてぐったりとなつて居る於松をそのまま抱え上げて褥の上に二人折り重なるようにして横たわった。
於松の火床口は、まだ行長の玉茎の根本を締め付けたままだった。

「於松は正一位の高級遊女になれる資質を備えて生まれてきておる…」

そう思いながら、行長はまた気を昂ぶらせて、無意識に二人の帯を解き、長襦袢をはぎ取つて肌を合わせた。だがそれでもなお、玉茎の根元をしつかり締め付けられていて、行長は動くに動けなかった。於松は昇天したように力なくぐったりとなつて横たわっていて、行長は於松の身

体に申し掛かったまま横たわっているしかせん方もなかった。「それでは余りにも於松が苦しからう…」と思い、向う横取りの姿勢になつて於松を抱きかかえ、何時しかそのまま寝入つて朝まで目覚めず、極楽浄土で於松と二人ながら胡蝶になつて睦み合い、戯れ合う夢を見て何度も精を爆発させた。

夜が明けて殿居の女中二人が入つて来た時、行長と於松はまだ繋がつたまま褥の中に横たわつていた。闇の中には、精水と淫水の入り交じつた隠微な匂いが漂つていた。女中達は一瞬戸惑いはしたものの、直ぐに状況を察して、分厚い褥の足元にひれ伏して、「お殿様お目覚めでございませうか…」と声を掛けた。

於松はそれに気付いて、慌てて飛び起きようとした。だが行長はそれを許さず、しっかりと於松を抱き締めて、「捨て置け…」と於松の耳元に小声で云つた。

「見ての通りの有り様じゃ…、二人とも身体を清めるによつて、支度をしてくれ…」
行長は背中に向けて云つた。

「畏まりましたござりまする…、ただいま湯殿番のお清の腰元に準備させましようほどに、暫しご辛抱下さりませ…、したが、於松殿は、先に私共が湯殿にお連れ申しましよう…」

「じゃによつて云うておる…、二人共に先にここで清めねばならぬのじゃ…」
行長はまた肩越しに云つた。

「状況を十分察せず、恐れ入りましたござりまする…、されば、今暫しご辛抱のほどを…」

そんな殿様と女中とのやり取りを聞きながら、於松は恥ずかしさで消え入りたい気分になり、居ても立つてもいられなかったが、殿様がちりと抱えられていては、どうにもならなかった。

やがて湯殿番のお清の腰元が大勢で大盥に湯を張つて持込んできた。

「準備が整いましたれば、於松殿を此方にお預かりいたしましよう…」

女中が云つた。

「そなたたちは皆下がつて良い…」

行長がまた肩越しに云つた。

「それでは、私共が…」

「えい、察しの悪い…、於松の気持ちを察しやれつ…、下がれと云うたら下がれつ…」

行長は癩癩を起した風に装つて云つた。

「ははつ…、申し訳ござりませぬ…」

女中は慌てて闇くろから下がつて襖を閉めた。

「さあ、於松、起きて身体を清めようかのう、この匂いの中に居るとまた兆してきそうじゃ…」

と云いながら、行長は漸く於松から離れ、夫々下帯で股間を覆つて、褥を離れて、大盥の脇で身体を清めた。

いつの間にか二人は小袖も長襦袢も脱いで肌襦袢と下帯だけになつてに気付いた。於松は、特に教わつていたわけではなかったが、奥女中の役目柄お殿様のお世話をするのが第一…と考へて、恥ずかしさを堪へて、最初に行長の股間の清拭を行い、腰元たちが用意した肌着を付けて、長襦袢と小袖を着せ掛けて帯を締め、御髪おんかみを結いなおそうとした。

「鬘は良い…、湯を使つてから湯殿番に結わせようほどに…、其方は若いに似ず良う気が利くのう、世話をするのが好きなのか…」

「あい、お殿様…、幼い頃より父や母の世話を良うして参りました…、今はお殿様のお世話をするのが私のお役目…、抜かりがあつてはならぬと思つております…」

「うぬ…、愛い女子よのう…、然れば、今度は儂が其方の世話をして取らせよう…」

「あれまあ、お戯れを…」

「其方を見ておつたら、世話をして見とうなつた…、これは儂と於松の間の秘め事じゃぞ…、さあ、肌着を取つて、もそつと近こう寄れ…」

行長は生まれて初めての趣向に、些か興奮して云つた。

「あれ、勿体ない…、それに恥ずかしゅうござりまする…、どうぞお許しを…」

於松は消え入りたい気持ちになつて云つた。

「儂が世話をしてとらそうと云つておる…、主命じゃと思つて世話をさせよ…、何事も経験じゃ…」

行長は、自分の思い付いた趣向に気の昂ぶりを覚えながら云つた。実際に行長はこれまで女子の裸を直に目の前で見るなどなかつた。「若い於松のしなやかな裸を清めてやる…」、それを想像しただけで行長は気が昂ぶるのを覚えた。「主命じゃ…」と云われては、於松にはせん方なく、於松は不承不承に行長の側近くに寄つて素っ裸になつた。於松は行長の側に立つて震えていた。お殿様のお手が付いただけでなく、このようなお戯れに身を任せていることに、自らの運命の不思議さを感じて、心の隅で興奮してもいた。於松の股間は、先ほど自ら手に取つて清拭し

て差し上げたお殿様の玉茎を確かに受入れていたことをしつかりと記憶している。それも嬉しくもあり、恥ずかしくもあることだった。

行長は、目の前で薄桃色に染まっている於松の透き通るような白い裸の身体を眺めながら、興奮していた。そして、大盥の水で絞った手拭で、於松の太股や腰や、生え際や空割をゆつくりと丁寧ていねいに拭き清めた。於松の額口はふつくらとして、明るい濃い肌色の柔らかい縮れた毛で覆われていた。その生え際の真ん中に空割が覗けていた。

「これが世に言う「上付きの開」^{ほと}なのか…」

行長は実際に他に見たことがないので比べようがなかったが、覗けて見える空割の上端にぼつんと見える鍋色なべいろの小核を目にしてそう思った。

於松は、行長の前で目をつむって佇み、行長の為すに任せていた。冷たい手拭いで股間を拭かれると、於松の全身がぴりりと緊張して震えた。何よりも殿御に自分の秘所を全て曝け出して見詰められ、触られていると云う事実じじつに消え入りたくないような恥ずかしさを覚えると同時に、興奮も覚えていた。

「於松、其方の身体は美しいのう…」

行長は於松のふつくらとした下腹部を眺めながら云った。

行長その言葉を聞いて、於松は、更に恥ずかしさが募り、同時に興奮した。眺めている於松の股間から、女の匂いが立ち昇って行長の鼻腔を擽り、行長はまた気の昂ぶりを覚えた。そして、自分の立場を忘れて、覗けて見えている於松の小核に思わず唇を押し付けて吸った。その瞬間、於松は全身を緊張させてわなわなと震え出した。於松の頭が痺れて、眩暈めまいが走り、顔くまれそうになった。

「あれまあ…、お殿様…、そのようなところをお吸いになって、私は恥ずかしゅうござりまする…」

於松は泣きそうな声で云った。

だが、行長はその成り行きなりゆきの行為を止めず、舌を使って小核を舐め擦った。それは一国一城の主の姿ではなかった。於松は立っていられなくなつてその場に頽れた。それで漸すすく行長はその行為を止めて、再び濡れ手拭いで流れ出て来た淫水を拭き取つてやった。行長は、目の前で全裸で横たわっている於松の薄桃色に上気した於松の身体を眺めながら、「愛い女子ういおなじじゃ…」と呟いた。

於松は初めての経験で、行長の奔放な性愛の秘技に翻弄され、何処か遠い天国にでも連れ去られたような気分きぶんにさせられて、自分自身を取り戻せないでいた。於松が正気に戻ったのは、それから四半刻も経つてからだだった。その間に行長は、於松に真新しい肌着と下帯を着せてやり、

長襦袢を着せ掛けて身体を擦ってやっていた。その姿は、もう国主とそれに仕える女中との間柄の姿ではなく、極普通の男と女の間柄の姿にほかならなかった。

於松が正気に戻って自ら長襦袢と小袖を身に着けるのを行長が手伝ってやることによって、於松は確実に行長の愛しい側女になった。そして於松にとっては、行長がただの国主ではなく、愛しい殿御になっていた。

城代家老の紋十郎に会うと、行長は包み隠さず於松に手を付けたことを話し、自分の側女として奥向きに部屋を与え、お付きの女中や腰元を必要だけ付けてやるように命じた。

紋十郎は、既に殿居の番士や奥女中からその事実を知らされていたが、何食わぬ顔をしてそれを聞いていた。

「それはそれは、御殿にはあの於松がお気に召されましたか…、早速、仰せの通りに致しましょう」と答えた。

「げに世の仲とは摩訶不思議なものよ…、一番あり得ないと思うた女子に真つ先に御殿のお手が付いたとは…」

紋十郎はその行長の命令を聞いて思った。

一方女中や腰元たちの間には、殿居の女中達から於松にお殿様のお手が付いたことが一遍に伝わった。それは一種の驚きとある種の嫉みを伴ってもいた。そして於松の例の鶯の鳴くような喜悅の声もその夜の殿居の女中から語り伝えられ、於松は陰で「鶯の方様」と云う綽名で呼ばれるようになった。

「御殿様には、殊の外於松殿がお気に召された由にて、本日よりご側室として奥向きにお移しするようにとのご下命ありましてござりまする…、間もなくお付きの女中が案内いたしますれば、早々に奥向きのお部屋にお移りくださりませ…」

と云う家老の大膳寺紋十郎の話を、於松の身体に稲妻に打たれたような衝撃が走った。

「あれまあ…、何と幸運なこと…、嫁には行けぬと云われ続けていたわらわがお殿様の側室に召された…、わらわが心の隅で思っていたことが、本当に起こった…、何やら恐ろしいようじゃ…、これでとと様とたた様のご心配ものうなる…」

そう思い、於松は俯き加減になつて目に涙を滲ませた。

「お泣きになるには及びませぬぞ、於松殿…、これは女子には名譽なこと、望んだとて易々とは叶えられませぬのじゃ…」

老爺心の慰めを云いながら、紋十郎はじつと於松の身体付きを見詰めていた。元々柔らかそうなしなやかで色白な太り肉で、男好きのしそうな女子だったが、「惜しむらくは顔の瘡痕あはた」、と思つていた於松が、一夜にしてどことなく艶やかな艶気を滲ませているように見え、「女子は男次第で変わるものよのう…、素の姿貌では真実が知れぬものじゃな…」

紋十郎は頭の中で呟いた。

「あい…、これは悲しみゆえの泪にはござりませぬ、感極まつての嬉しの泪にござりまする…」

「さもあらなむ…、於松殿には一大出世ですからなあ…」

紋十郎は皮肉めいた口調で云つた。

「何はともあれ、於松の方様付きの女中、腰元の人選を致しますれば、今暫く御局にてお待ち下され」
そう云われて、於松は嬉しさを包み隠しながら腰元の局に引き下がった。

こうして、於松は、紋十郎の人選した於松付きの老女、祐筆など十名の女中や腰元と共に奥向きの部屋に移つて行つた。

「於松が側室として殿様に召された…」と云う話は、城代家老の大膳寺紋十郎から、郡奉行の朝比奈絃九郎の口を経て父親の東野孫三郎に伝えられた。孫三郎は一瞬我が耳を疑つて、暫し呆けた顔をして、支配の朝比奈絃九郎の顔を眺めていた。

「如何致した、孫三郎…、其方の娘の於松が側室於松の方様として御殿に召し上げられたと云うておるのじゃ…、これは冗談ではない真の話として、ご家老大膳寺紋十郎様よりのご達しのことじゃ…、何よりの目出度いことじゃ…、素直に喜べ…」

「いかさま、余りにも思い掛けないことゆえ、我が耳を疑うてござりまする…」

「うむ…、げに世の仲の道は分らぬものじやて…、思えば、御殿のお国入りの宴のあと、御殿付きの女中の中に於松を必ず加えよ…とのご下

命ありし…と聞く…、御殿はその時既に於松の中に心を捉える何かを見付けておられたのやも知れぬ…、これは、其方たちの娘の一大出世で…、女子は、表向きの姿貌では計れぬものじゃて…、これで其方たちの心配も消えたのう…、何れ其方にも於松殿の分に見合ったご下命があるやも知れぬ…、素直に喜べ…、

女子のことは、えてして外見の姿貌だけで判断しがちじゃが、女子にとつて大事は、その持てる心根や氣質、生来身に付いた素養や物腰などなのじゃな…、その上で更に重要なは、臍下三寸のところなる生れ付きの道具立てなのじゃな…、もつともこちらの方は、上品に当たるはお江戸の富籤とみくじに当たるよりも希有のことなのじゃろう…、我ら武家の生活は、お家第一のがんじ搦めの仕来りに縛られておつて、家柄だけで相方を選ぶ故に、そのようなことは問題にせぬ…、予め女子たちを集めておいて、その中から選ぶなどは、御殿にして初めて出来ることなのじゃな…、それにしても、其方たちは素直で性格の良い朗らかで芸能に巧者の娘を育てておつたのが幸いしたのう、臍下三寸のことは御殿にしか判らぬことじゃが、お手が付いて即、側室にお召し上げ…となつたからには、上品じょうほんであつたのであろう…」

絃九郎は、日頃の武家の生活では重視されない世の仲の道の微妙な綾に触れて、配下の者の家に訪れた思わぬ幸運を喜んだ。

孫三郎から話を聞いた紀世は、目を丸くして驚いた。

五代国主の初のお国入りに際して、身に付けさせた歌舞音曲の才が功を奏して、お殿様付きの腰元としてお城に上げた時、苦心惨憺して育てた可愛い娘と会えなくなるのは暫しの間のこと…、と思いはしたが、お殿様の側室として召され、遙かに遠い存在になつてしまふ…などは、思いもよらないことだつた。それに、日頃「嫁には貰い手がない」と言い聞かせていた娘が、他の見目形の良い娘たちを差し置いてお殿様の目にとまり、側近こう仕えさせるように命じられたのも束の間、真つ先にお手が付いて、すぐさま側室として奥向きに召されるなどは、想像の枠を超えることだつた。

「これも、「色白は七難を隠す…」とやら申しますし、あの娘が素直で優しく朗らかで、少しも悪びれたところのない純な娘に育つてくれたお陰でしょうか…」

紀世は於松がどのような理由でこのような幸運を掴むことが出来たのか判らずに、内心喜びと感動に打ち震えながら、孫三郎に聞いた。

「さもあろう…、じゃが、どうやら儂らは於松を表面でだけしか理解していなかつたようじゃな…、

「嫁には行けない…」などと云い続けたことは、我が娘のことながら実は僭越な思い込みじゃつたのであろう…、儂らは世間体だけに囚われておつた…、じゃが於松は於松なりに素直に豊かに育つていたのじゃ…、他人はそのような於松を如何様に見るのか…、儂らは少しも知らなんだようじゃ…、ましてや、儂らが丹波の山奥の国とはちごうて、華やかな文化文芸の満ち溢れると聞くお江戸で、若きより「粹人」と謳われたと

云われる我らが御殿が何をどのような目でご覧になり推量られるのか…、それは農らの想像の埒外のことだったのじゃよ…、

於松は健気にも農らの申すままに素直に育ち、ありのままの姿で御殿の前に立ち、そして御殿の「粹人の目」で認められたのじゃ…、於松は、御殿の目には「まこと愛い女子じゃつたと云うことじゃ…、

天晴れ於松は、己が自身女子の値打ちを証明して見せたのじゃ…、それもこれも全て其方の献身的な育児の賜物じゃ…、普通なら幼少の内に何処かの尼寺に預けて、仏門に帰依せしめていた筈じゃが、それを不憫がつて、今日のように育て上げたのは、他でもない其方の女子の執念じゃつた…と農は思う…、農は其方にも礼を云いたい…」

「何の、わらわに礼など…、そのようなことは申されませぬ…、然れど、ご主人様、於松が一气にお城の奥向きの高みに昇り詰めて滅多に面談も適わぬようになったは、些か口惜しゅうございますわねえ…」

「そうは云うても、於松はもう十七歳…、普通なら嫁に行く歳頃、嫁に行けば同じことじゃて…」
